水守亀之助

文

雑誌記者如きの道理は仲々通らない。それでゐて馴らされるところ苦いと来てゐるからやりきれない。　哀れ憫むべき境涯といはざるを得ない。

　しかし、何をいつても愚痴に終るのが落ちにあるだらう。他をもとめなければ、雑誌記者だつてどうにもならないからな。労働者と同じやうに何時間労働、給料何割工場増の要求運動でもするのが関の山だらう。　その理由は分りきつてゐる。　すべてが営利会社とつな

相馬屋製